スリランカ学生の巣立ち助け14年

中日新聞安城今池町専売所　桑山利子

スリランカの学生から「ジャパニーズ・マザー」と慕われ、長年に及ぶ進学支援

■ 実施期間

平成5年～

■ 活動概要

桑山利子さんは、中日新聞安城今池町専売所で、毎朝180部余の新聞を自転車で配達する傍ら、平成5年から14年間にわたり、経済的理由で就学できなくなったスリランカの若者を支援しようと、月々の給料4万円全額を奨学金を運用している財団に寄付し、これまで41人が高校、大学に進学することができた。このほか、5年前から、アフガニスタンの2人の子供の里親として支援を始め、国内でも「あしなが育英会」に年間10万円を送金している。

また、シチズン時計の2006年度「シチズン・オブ・ザ・イヤー」を受賞、その賞金100万円と自身で貯めた50万円とを合わせて、スマトラ沖地震の津波で消失したスリランカの小学校再建のために寄付した。

＊

桑山利子（くわやま・としこ）

いつものように配達する桑山さん

「2006年度シチズン・オブ・ザイヤー」を受賞した時の賞状と副賞の時計

長年にわたりスリランカの子供たちのために学費としての寄付を続けてきたことに対するヘラート財団からの感謝状

スマトラ沖地震の津波で消失したスリランカの小学校の再建のために寄付。今年の5月その学校の完成式典に招待され、その時に県知事からいただいた感謝状

年(平成18年)2月26日(日曜日)　中日新聞

貧しいスリランカの学生たちの進学支援を長年続ける愛知県安城市今池町の桑山利子さん(67)が3月1日、半世紀を経て自らの夢だった高校を巣立つ。勉学の傍らパートで得たお金をすべて異国の若者の将来に託すのは、かつて家庭事情で高校に進学できなかった思いからだった。「高校で学んだ英語を使って、スリランカに出掛けたい」。卒業後もパートと学生支援は続けるという。

67歳、私も高校卒業

スリランカ学生の巣立ち助け13年

安城の桑山さん

パートで送金 勉強と両立 半世紀の夢実現へ

新聞店で作業をしながら高校生活やスリランカの高校生について語る桑山利子さん。後方は深谷充店長＝愛知県安城市今池町で

現在、同県立安城高校定時制四年生の桑山さんは、一九三八（昭和十三）年、安城市の農家の二女として生まれた。

五歳の時、陸軍に召集された父親がサイパン沖で戦死。姉と弟の三人を一人で育てる母親の必死な姿を見て、小学校の時から畑仕事を手伝うように。中学でも高校に進学したいと言えるような経済環境にはなく、卒業後は農業を手伝い、就職した。

詰め襟やセーラー服姿の同級生を街で見かけると電柱の陰に隠れた日も。「当時は進学できなかったのが恥ずかしく、悔しかったんでしょうね」と振り返る。

その後、八百屋を開業し結婚。二十年前から開店前の空き時間を使って中日新聞配達のパート勤めも始めた。十三年前、経済的な理由で進学できないスリランカの若者の新聞記事を見つけ、自分の過去と重ね合わせた。

現地の学生とやりとりする手紙で、「ジャパニーズ・マザー」と慕われる桑山さん。そんな手紙に刺激され、「今なら私も行けるかも」と、子どもが社会人になり、家業もやめた四年前、安城高校定時制の受験を決意し入学。無遅刻、無欠席で頑張り通した。

卒業式で答辞を述べる桑山さんは「この年ではさすがにセーラー服は無理だったけれど。あこがれた夢がかなえられ、感謝でいっぱい」と満足そうな笑みを浮かべる。

記事には、当時岐阜大に留学していたスリランカ人らが私費で設立した奨学金制度が紹介されていた。

「一人が年間一万二千円ほどで高校に通えるのなら」と、月々の給料四万円余をそっくり、奨学金を運営している福島県の財団に寄付。休むことなくパートにも励み、子どものころから染みついた倹約をいっそう心掛けた。これまでの送金はおよそ五百万円。高校や大学に進んだスリランカの学生は四十一人に上る。

中日新聞　平成18年2月26日付朝刊